

アジア・アフリカ支援米を収穫

連合北海道と北海道農民連盟で構成する「食・みどり・水を守る道民の会」では、食料不足に苦しむアジア・アフリカ諸国を支援するため、道内4ヶ所で作付けしている支援米を収穫しました。

アジア・アフリカ支援米の取り組みは、「支援米の作付け」と「茶碗一杯のコメ・カンパ活動」に加え、食料の重要性や農業促進の必要性などを体感するため、「田植え・稲刈り体験」を実施していましたが、今年は新型コロナウイルス感染リスクを考慮して中止となりました。支援米として作付けされた圃場では、生産者の手によって収穫され、来年には西アフリカのマリ共和国に届けられます。



田植え後（2020.5.21 由仁町）



収穫前（2020.9.9 由仁町）

マリ共和国が位置するアフリカでは、飢餓に苦しむ人々が大勢います。アフリカの人口はおよそ12億人といわれていますが、そのうち2億5,000万人が栄養不足、あるいは慢性的な食料難の状態にあるといわれています。

世界で飢えに苦しむ人の数は、2019年に世界人口の8.9%にあたる約6億8,780万人にのぼりました。飢餓人口の最も多い地域はアジアとなっていますが、最も急速に拡大しているのはアフリカであり、このままの傾向が続けば、慢性的な飢餓に苦しむ人口の半分以上がアフリカにすることになります。さらに、新型コロナウイルスのパンデミックによる飢餓の急増も懸念されています。

マリ共和国では洪水や干ばつ、絶え間ない紛争によって食料危機が続いています。マリ共和国の人口はおよそ1,908万人といわれていますが、19万4,000人の子どもが急性栄養不良、65万人が食糧不安に直面している一方、日本では年間で推計643万トンの食品が廃棄されているのです。

食・みどり・水を守る道民の会では、食料不足に苦しむアジア・アフリカ諸国への支援をはじめ、安全で安定的に供給される食料の確保、道産食品の消費拡大、地産地消など、持続可能な農林水産業の確立を求めています。



収穫後（2020.9.17 由仁町）